

『北里柴三郎試論・問題の所在と初期の教育』

福 田 眞 人

目次

はじめに

出生

文献表

はじめに

これは明治から昭和時代にかけて活躍した医学者北里柴三郎きたざしほさぶらう（嘉永五年一八五二—昭和六年一九三二）の生涯を俯瞰しようとする試みである。

いかなる時代にもエリートは存在する。狩猟時代には、おそらく狩猟のエキスパートが、貴族の時代には優雅と富を有する者が、

そして武士の時代には勇猛果敢さを誇った者が。しかし、新しい明治維新の時代に有用な人物とは、近代国家の発展に寄与することが出来る人間であった。西洋列強に早く伍すために、富国強兵、殖産興業を押し進める時代にあつては、しかし、軍人と言つても武家の時代の単なる武人だけであつてはならなかつた。諸外国との通商に秀でた単なる商人だけであつてもならなかつた。近代国民国家擁立のための天下国家を論ずる政治的人間だけでも不足だつた。

そこには科学が、その発展によつて人類に貢献すると言つた宏大な理想が必要だつた。

十七世紀西欧で収集と整理・命名の博物学が一気に花開き、医学をも含めた科学がその黎明期を迎えた。おおよそ医学と呼ばれるものは、西洋に限ればギリシャのヒポクラテス（約紀元前五

四世紀)に、東洋の中国では脈学の創始者扁鵲(前四〇七〜三〇〇年頃)に、インドではアユールヴェーダ(紀元前三〇世紀)に、各々起源があるとされる。

江戸時代から、明治維新を迎え、まさに西欧列国に伍さんとした時、日本に必要なのは開明的思想とまさに科学技術の摂取、科学的発明の基礎を固めること、その技術ならびに知識を遍く臣民に分け与えることだった。

今日、しばしば日本は経済は一流、政治は三流と揶揄されるが、これに習って言えば当時の日本の技術は三流、国力もやつと三流か二流どころだった。しかし、漢方医学が主流で、もっとも遅れているかに見えた当時の日本の医学を、世界の一流にまで押し上げた人物は恐らく北里柴三郎と野口英世(一八七六—一九二八)であった。

毀誉褒貶の烈しい野口は華々しい活躍によって世界のノグチになったが、その野口も、北里の弟子の一人だった。北里は黙々としかも華々しい実績を上げ、まさに世界のキタザト(キタサト)になっていったのである。

端的に言って、それでは北里の功績とは何であったのか。彼の生涯を詳細に検討する前に、その全体像を俯瞰することで、北里論の始まりとしたい。

北里柴三郎の功績は、編年的に言えば大きく言って次のようなものであったろう。

(1) ドイツ留学し、そこで師事したコッホ(Robert Koch, 1843-1910)の元で修得した細菌学的手法によって、破傷風菌純粋培養に成功したこと。また破傷風免疫体(抗毒素)を発見したこと。
(2) ドイツ人のベーリング(Emil von Behring, 1854-1917)と共同でジフテリア血清療法を発明したこと。ベーリングはこの功績により第一回ノーベル医学賞を受賞した。

(3) 日本帰朝後、伝染病研究所を設立し、日本における細菌学研究、伝染病研究の端緒を開いたこと。(福澤諭吉、森村市左衛門らの援助を得て)

(4) 伝染病研究所において、単なる細菌学研究だけではなく、その研究の基礎を成すものとして実験動物への特別の配慮をし、獣医学など幅広い協力態勢を取ったこと。

(5) その伝染病研究所の資金調達を潤滑に行うために、結核療養所土筆ヶ丘養生園を開園したこと。

(6) 伝染病研究所ならびに北里研究所において、優秀な研究者を育成し、輩出したこと。野口英世(梅毒および黄熱病研究)、北島多一(一八七〇—一九五七)、蛇毒の研究)、志賀潔(一八七〇—一九五七、赤痢菌発見)、秦 佐八郎(一八七三—一九三八、梅毒の化学療法サルバルサン発見)ら錚々たる面々である。その

他にも梅野信吉による狂犬病予防液の発明、北島多一によって新
知見が加えられたコレラの免疫血清療法等が医療の場で有効に生
かされた。

(7) 明治二七(一八九四)年香港においてペスト菌を発見した
こと。(フランス人細菌学者イェルサン Alexandre Emile John
Yersin, 1863-1943との別個での同時期発見である。イェルサンは、
中国に二つのパスツール研究所を開設したこと、ならびにインド
シナにゴムの木を導入したことで知られている。)

(8) 大正二年(一九一三)、国家の由々しき問題としてようや
く認識された結核の予防対策組織として設立された結核予防協会
の副会頭となり、また結核予防学会を開催してそれを取り仕切っ
たこと。

(9) 大正三(一九一四)年、自らが興し、その後内務省管轄に
なっていた伝染病研究所が行政改革の名のもとに文部省管轄(つ
まりは東京帝国大学の管轄下になること)になるに及んで、官を
辞し、自ら再び北里研究所を創立し、私立の研究所として多大の
功績を誇ったこと。この現在も続く北里研究所の基礎を築いたの
みならず、今日の北里大学の礎石を置いた功績。

(10) 大正六(一九一七)年、慶應義塾大学に医学科が創設され
ると、乞われてその科長となり、医学部の発展に寄与したこと。

(11) 大正二二(一九三三)年、医師の団体として初めての全国

組織となった日本医師会の会長に就任して、医師の公益と福利の
ために尽力したこと。

おおよそこれで北里柴三郎の功績の全体は見えて来た。それ
は北里の生涯の軌跡、その意識と意図、希望の軌跡とはどのよう
なものであったのだろうか。それを再び概観すれば、既に見たそ
の業績と重複し、時に矛盾するものが有るとしても、適宜時系列
的に配列すればおおよそ次のようになるであろう。

(1) 総庄屋の家に長子として生まれ、また母が武士の出であ
ること。

これらの出生の環境も、北里の精神に大きな影響を与えたこと
であろう。それは村を束ねる意識と、まさに社会を束ねると言っ
た二つのおおきな意識、指導的立場の人間であるべきという自覚の
薫陶を無言の内に受けていたのである。

(2) 学問所での、意識の醸成。
勉学の進展と共に指導者的立場への強烈な自覚が生まれたこ
と。

(3) 学問をしている親戚の家に預けられたこと。
厳しい修行を積みながら、自分の学問がどんどん進むことを自
覚し、更なる勉学の志望を持った筈である。そこで精神的修練が
大きな位置を占めた筈である。

(4) 北里には武家、政治家の志望があった。

国手(医師)と坊主への強い侮蔑の念があった。それは当時の社会事情を反映している。医師の地位は低かったのみならず、廃仏棄釈の世情があつて、ますます仏僧は肩身の狭い状況に置かれていた。幼少時の志望を堅持していたと見ていいだろう。

(5) 熊本医学校での生活。

ここでの生活は、秀才としての北里の存在を、学生のみならず、先生にも認めさせたことは大きかった。それは最初の医学の師とも呼ぶべきオランダ人マンズフェルト(C. G. van Mansvelt, 1832-1912)との出会いであつた。彼は、オランダ語の流暢なことを賞賛したのみならず、個人的に北里に地理学などを講じ、さらに北里に別の志望あることを見抜き、医学の素晴らしさを実感させ、医学を志望させるに至る方策を練つたのである。それは当時科学の最先端であつたミクロの世界、つまり顕微鏡の中の世界を北里に垣間見させるだけで十分だつた。細菌学の種はここに北里の胸深くに蒔かれたのである。

(6) 熊本から上京までの経緯。

マンズフェルトから強く将来の東京での修学を勧められ、さらにその後はヨーロッパでの研学を勧められている。上京の方法、費用の負担者は誰かなどのいくつかの問題が未解決である。

(7) 東京医学校、東京帝国大学医学部での学習。

先生と学生の構成。担当科目と先生の授業の方法、その当時の世界の水準との整合性など。

(8) シュルツェとの一件。

東大医学部におけるシュルツェ(Emil A. W. Schulze, 1844-1925)と北里柴三郎の師弟の關係を知る上で面白いエピソードを提供してくれる。権威であれなんであれ、不正や歪みに対して厳しい北里の一面を示しているエピソードではある。ずっと後のドイツでの二人の再会の時のエピソードも微笑ましい。

端的に言えば、学生にまだ教えなかつたことを医学部の試験問題に出すことの多かつたシュルツェに対して、北里が異義を唱えたのである。後に、ドイツでコッホの研究室における会合に出いた時に、シュルツェが得意げに日本でのエピソードを述べた時、決然と、反抗したのは自分であると名乗り出て、シュルツェを凹へこましたと言つのである。

(9) 学生寮での演説三昧の生活。

武士志望、政治家志望のかつての姿を彷彿とさせる活躍である。あたかもそれは今日のクラブ活動に類したものであつたかも知れないが、口吻泡を飛ばして演説していたという姿は、実にアジテーターの面目躍如たるところがある。また後の様々な組織を整え指導した片鱗がここにも垣間見える。

(10) 弟、妹を熊本から呼び寄せ、生活の面倒を見る。

家長になるという自覚、さらに一家を挙げて「立身出世」に進んだと言ふことであろうか。世を覆っていた「末は博士が大巨か」という立身出世の志向が、強く北里の胸にも響いていたのである。後には父母も東京へ呼び寄せている。熊本から上京し、そこで成功した者の多くは、やがて一家を挙げて上京し、一度と戻つてこなかったらしい。弟袈裟男は東京帝国大学法学部卒業後、帝国生命保険会社専務副社長となった。

(11) 内務省への就職。

成績が優秀でなかったので東大に残れなかったということが言われているが、本当だろうか。むしろ、社会的貢献に、予防医学に北里の興味があつたのではなかったか。象牙の塔に籠るタイプではなく、むしろ公衆衛生、保健にこそ北里の本領が發揮されるのではなかったか。

(12) 結婚。

アルバイトで働いていた牛乳販売所の衛生試験係から、その社長である男爵松尾臣善（後の日銀総裁）の娘^{まよ}と結婚した。

(13) ドイツ留学への道程。

内務省衛生局から留学。明治一八年（一八八五）、内務省東京試験所で緒方正規の手ほどきを受けて、その手法を長崎でのコレラ検査に応用。その実績を認められ、すでに決まっていた中浜東一郎（一八五七—一九二七、中浜ジョン万次郎の長男）と共に、

異例のドイツ二名派遣となった。

(14) コツホのもとでの研究とその成果

ドイツで細菌学の権威コツホ（Robert Koch, 1843-1910）の許で、最初ベルリン大学で十九篇の論文を発表し、後に国立伝染病研究所で勉学して五篇の研究論文を発表した。天皇陛下の下賜金。恩義と大恩

(15) 帰朝後の冷遇と厚遇。

すでにベルリンでその令名を轟かせ、たとえばアメリカのフィラデルフィア大学や英国のケンブリッジ大学から三顧の礼をもつて招聘されていたにも拘わらず帰朝を決めた北里であれば、日本が朝野を挙げて歓迎することと思われたが、実際には明治二五年（一八九二）の帰朝に際しては、ほとんど無視に近いような迎え方だった。その原因は何だったのか？有り体に言えば、東京帝国大学一局支配の構造の中で、その医学の中心人物たる、またかつての熊本の古城医学校（熊本医学校）の同級生にして、北里に細菌学の手ほどきをした緒方正規（一八五三—一九一九）に対する、正面切つて純粹に学問的批判をしたことであつた。（これが後の伝染病研究所の内務省から文部省／東大移管への発端であつたとする意見が強い。）

(16) 伝染病研究所から北里研究所へ。

日本政府の冷遇を前にして、その才能を惜しんだ福澤諭吉（一

八三五 一九〇一）が自分の土地を無償提供し、またその働きかけによって財界の森村市左衛門（一八三九 一九一九）らが私財を提供して、私立伝染病研究所を明治二五年に設立したのである。

（17）世界での位置。

それは、医学会での写真での北里柴三郎の座る位置に如実に表れている。

彼の位置は、どんどん端から真ん中へと移動している。

（18）恩人への感謝の念を忘れなかったこと。

熊本時代の恩師の一人栃原への恩義から、娘を北里研究所に雇ったこと、コッホ先生亡き後、第一次世界大戦後の物資貧窮時代に困窮していたコッホ未亡人に幾許かの援助を差し伸べたこと、また東京で、世界で栄達を遂げた後も、故郷への恩義を忘れず、北里文庫を創設し児童のための本を贈呈した事、また寄付を幾度となく行ったこと。それは昭和六年に北里自身が亡くなった後も、なお昭和三〇年代に亘っても続けられたこと。

こうした羅列された項目で北里は語り尽くせないが、明らかに指導者としての立場、政治家的言動がそこに見て取れる。また、そこには私人、家庭人としての北里柴三郎の像が皆無である。そうした点は追々論ずるとして、先ず生い立ちから東京に出るまでの経緯を辿ることしよう。

一・出生から上京までの道筋

江戸末期の旧暦嘉永五年十二月二十日（新暦一八五三年一月二九日）に、肥後国北里（現在の熊本県阿蘇郡小国町北里）の総庄屋北里是性（こゝろ）と豊後森（大分県）久留島藩士加藤海助の子女貞（むすめ）の下に生を享けた。北里柴三郎の誕生である。

なかなかのきかん坊で、母の血を受け継いだものか、また肥後男児（もつちこ）の常か、武家尊重の風潮を一身に受けたのか、とにかく武人として名を立てようと志していた。

しかし、両親は武人となることを好まず、医者になることを勧めた。

本人は、「長袖（医者）と坊主は尊敬に値しない」と放言し、剣道の練習に余念がなかった。文字通り猪突猛進というのが、北里柴三郎の生涯を表すのに最も相応しい。しかし、それも細心の優雅な、文化を愛でるタイプの突進型だったことに注意しなければならぬ。

両親の厳しい教育は、しかし、それだけでは十分でないことが分かった。

教育は、本人の希望とはまるで無関係にどんどん進んで行った。まず安政五年（一八五八）五歳の年に、家の近くの寺子屋に通

い始めた。⁽¹⁾それから八歳で、小国郷志賀瀬村にあった伯母満志の嫁ぎ先であった橋本淵泉家⁽²⁾に預けられ、その父龍雲から四書五經の教えを受けた。この龍雲は、医を業としていたが、漢学の素養もあり、それで北里に素読を授けたのである。北里は、ここに滞在中、この家の縁側を毎日丁寧⁽³⁾に反覆拭き掃除をして、磨き上げたということ、長い間、この縁側を子女教育のよい見本として保存していたと言うことである。ここには現在、庭先にかつて北里が教えを受けた旨の立て看板が立てられている。さらにその土蔵から多くの当時の教科書、薬学書、本草学の書物などが発見され、貴重な時代の証言をするものとして、北里研究所に贈呈され、東洋医学研究所で分類、排架された。

次に北里は、母の実家である久留島藩土加藤海助の家に、文久三年（一八六三）に預けられた。久留島藩の講習所で学びたいという願いがあつたが、他藩の者ということで人所が許されず、結局、儒学者園田保の私塾で学んだ。その願う所は、武士となつて先祖の榮譽を担うことであつた。その願いが叶わないとなると、いきおい言動に粗暴なものが目立ち、追われるようにして実家に帰り、またすぐに熊本遊学に出た。幼少の頃より、学問のために北里は実家に長く留まつたことがなく、両親が長男柴三郎の文武学芸について非常に気を配つていたことが知れよう。

慶応二年（一八六六）に熊本に出ると、最初儒学者医学者田中

司馬の門を叩いたが、武道の鍛練に精を出し、後に明治元年（一八六八）に細川藩儒者栃原助之進の門に移つた。

明治二年（一八六九）の春には、熊本細川藩の藩校時習館⁽³⁾に入寮している。しかし、翌年の七月には政府の廃藩置県の令が出て、藩校時習館は閉校となり、退寮の憂き目にあつた。

半年ほどの余暇の後、明治四年（一八七一）二月に熊本城下の「医学所及び病院」、通称古城医学校⁽⁴⁾で学び、そこで長崎医学校から転任してきたオランダ人外国教師マンズフェルトにその才覚を見出された北里であつた。

北里は、その語学の才能を認められ、マンズフェルトの授業の通訳を任された。

その上、彼は北里に世界の地理をも個人的に教授している。確かに、北里はマンズフェルトに見込まれ発見された学生であつた。そして何より医学の面白さを教えてくれたのはこのマンズフェルトだつた。

それは顕微鏡で、これまで見たこともない世界を北里に示して見せたことだ。

北里は、敏感に師の配慮を感知し、また顕微鏡の中に見出した微生物の世界に魅入られたのである。

マンズフェルトが去ると、北里は新たな学習の場所を求めて東京に出ることを決心した。今日の我々が考えるよりも遙かに物理

的距離の遠かった当時においては、自宅を去り、熊本に出ることさえ数時間を要して徒歩で行われた。ましては東京に出るには、まず博多に出て、そこから山陽本線に乗って神戸に至り、そこから東海道線に乗って新橋に至ることであった。

東京に出たのは、東京医学校（後の東京帝国大学医学部）でさらに医学の研修を積むためであった。（この項未完）

【註】

(1) 儒学中心の学問体系。その中でも朱子学はとりわけ君臣の関係を重んじて、忠孝が社会の道德の中心になっていた。一般庶民にもっとも影響のあったのは石田梅巖の心学で、土農工商の中で最下位にあった町人が経済を握るにつれ、庶民教育も次第に進歩したのである。寺子屋の課程の読み書きは、いろは四十八文字、名頭、村名、国尽くし、農業往来（手紙）、商売往来、庭訓往来、さらに実語教などを教えた。算盤は八算相場割を用いて教えた。塾は、大概四書五経を教えるのが主で、素読、輪読、聴講、輪講と種々あった。

(2) 藩の医学の為の再春館には、橋本龍雲、その子淵泉が学んだ記録がある。二人は、また広瀬淡窓の開いた私塾咸宜園で学び、その入門帳に各々、龍雲は文化十二年七月二日、息子淵泉天保十三年十月二十五日入門と記録されている。門弟三千人、その中には渡辺長英、大村益次郎、僧五岳らがいる。また名士の来訪もひきを切らず、頼山陽、田能村竹田、高山彦九郎、帆足万里、梁川星巖らが名を連ねている。肥后阿蘇郡

志賀瀬で医師の業を成しながら、私塾を開いたもので、龍雲は明治十二年に七九歳で没した。（『小国の教育』、『小国郷史』六三三―六二五頁。）さらに興味深いのは、次の記述。

「博愛堂塾主橋本龍雲、志賀瀬にあり、日田広瀬淡窓の咸宜園及藩校再春館に学ぶ。教ゆる順は朝読書昼習字算術で、前記の他庭訓往来、四書五経左伝史記傷寒論女子には小倉百人一首、女大学など、年限に制限なく、束修謝礼も定限なく志によつて樽料等受納する。文政十二年開塾、文久、慶応に至り老衰でやや生徒へる。子淵泉これをつぎ明治七年小学校設立迄四十五年間医師の傍ら教育に当る。生徒百六十人。」（『續小国郷史』四八四頁。）

「恩師橋本龍雲氏三十三回忌墓前追悼

南小国村故橋本龍雲氏は当時医師として令聞高く、学問該博而も多芸多趣味の人にして、殊に勤王の志深く同志の士と交遊し其書を講じ道を説くに当りて言勤王の大儀に及ばざる事なく、又仁慈の情にとみ毎月二十九日には必ず無料施薬術を行ふ等、其学徳近郊に洽く笈を負うて来り学ぶ者頗る多し。」（『九州日々新聞』明治四五年一月二五日記事）

(3) 細川藩では、藩士の師弟教育男だけであることは言うまでも無い）として藩校時習館を宝暦五年（一七五五）に城内二の丸に設立した。この時習館は明治三年の閉校まで、実に百二十年続いた。また翌年の宝暦六年には医学研究、医術研修のための再春館を創設し、医学寮を設けた。さらに漢方医学の附属菜園として繁慈艶（俗に御菜園）を設けた。（『小国の教育』、『小国郷史』六二〇―六三三頁。）

(4) 古城医学所、後の熊本医学校であるが、その前身は、熊本藩が宝暦六年（一七五六）に建てた藩の医学寮「再春館」で、明治三年（一八七〇）七月八日に廃止され、その百十五年の歴史を閉じた。その後新たに

十月六日、長崎から吉雄圭齋を院長に招いて西洋医学の病院を新設したのである。さらに翌年、その吉雄の推薦で長崎医学校から招いたのがオランダ人海軍軍医マンズフェルトである。

この古城医学校については、その位置が、かつて安土桃山時代の大永・享祿年間（一五二一—一五三二）の頃に、鹿子木親貞（叔心）によって隈本城が築城されたところにあった。さらに一世紀後、現在の地に加藤清正によって熊本城が建造されるに至った。それで旧来からある隈本城は、古城（現在の古城町）としてその名を残すようになったのである。

旧来の熊本城、古城の位置と、古城医学校、現在の熊本県立第一高等学校の位置関係が分かるように、同高校の教頭久保田和弘らによって同定された地図を参考までに掲載しておく。（図一）

古城医学校教師マンズフェルトと時を前後して、熊本洋学校に奉職したアメリカ人教師ジェーンズ（Leroy Lansing Jones, 1838-1909）の宿舎が現在もなお場所を移して水前寺公園の南側で保存されている。規模も形も、マンズフェルトの宿舎と似ていたのかも知れない。（ジェーンズ邸写真、図二）

ウエストポイント陸軍士官学校を卒業したアメリカオハイオ州出身の教育家、ジェーンズは、南北戦争に北軍として参戦し、大尉となって終戦。明治四年（一八七二）八月二五日に熊本へ着き、九月の開校から明治九年（一八七六）九月の廃校まで、キリスト教的信念に基づく全人格教育を行った。またジェーンズが行った日本初の男女共学教育は、後の熊本女学校設立（一八七七年）への流れを作った。

ジェーンズ一家が去って二週間後の十月二四日、熊本では明治政府への一連の土族反乱のきつかけとなった神風連の乱が起り、その翌年の西南戦争まで混乱の時が続いた。

幸いにも教師館は戦火を逃れ、征討大総督である有栖川宮熾仁（たるひと）親王の宿所とされたがこの有栖川宮の許可により、ここで敵味方関係なく戦傷者を救済する博愛社が設立された。博愛社は、その十年後に日本赤十字社となった。

「わが国における博愛社（日本赤十字の前身）の創設も明治十年の西南戦争看護にさかのぼることができる。元老院議員佐野常民は明治十年五月一日に熊本城内の総督本営を訪れ、征伐総督有栖川熾仁親王殿下に両軍の戦傷病者救護のため「博愛社」の設立を懇請し直ちに内諾を得ることが出来た（正式の許可は五月三日）。なお当時の総督本営の建物は肥後藩主であった細川護久侯が外人教師ジェーンズを迎えるために、明治四年九月に建築した洋式の建物であった。」（『日本赤十字社熊本支部史』より）

やがて熊本大学医学部に連なるその大きな歴史を瞥見しておくこと次のようになる。

- 宝暦六年（一七五六） 肥後藩主細川重賢、医学寮を創設して再春館と称した
- 明治四年（一八七二） 廃藩置県により官立医学所兼病院（通称「古城医学校」と改称
- 明治二年（一八八八） 勅令により全国の県立医学校が廃止
- 明治二年（一八九六） 県の補助を受け、私立熊本医学校を創設
- 大正二年（一九一三） 熊本県立熊本医科大学となる
- 昭和四年（一九二九） 官立熊本医科大学に移管される
- 昭和十四年（一九三九） 附属医学専門部及び附属体質医学研究所を設置



図1 古城医学校・熊本洋学校と現在の熊本第一高等学校の位置関係を示す図



図2 熊本洋学校教師館 ジェーンズ邸

昭和二四年（一九四九） 熊本大学医学部及び附属病院となる

〔文献表〕

〔書籍〕

石黒忠憲『懐旧九十年』岩波書店、1983年。
伊藤真次／佐野豊『日本医学のバイオニア』2巻、丸善、2003年。

- 伊藤智義／森田信吾『栄光なき天才たち』第四巻、集英社、1997年。
鶴崎熊吉『青山胤通』青山内科同窓会、1930年。
鹿子木敏範『北里柴三郎回顧』肥後医育記念館、1978年。
鹿子木敏範『熊本における医学教育の変遷』古城医学校から熊本医科大学まで、肥後医育記念館、1985年。
鹿子木敏範、鹿子木敏範著作集・落葉集、医療法人桜ヶ丘病院、1999年。
鹿子木敏範／松村勝之／宮崎美代子『肥後医育史年表』肥後医育記念館、1976年。
禿迷廬（かむろ／めいろ）『小国郷史』熊本県小国町・河津泰雄、1995年。
北 篤『正伝野口英世』毎日新聞、2003年。
北里一郎『北里柴三郎の人と学説』北里一郎、1997年。
北里学園編『北里柴三郎記念館』北里学園、1987年。
北里研究所編『北里研究所五十年誌』北里研究所、1966年。
北里研究所編『北里研究所七十五年誌』北里研究所、1992年。
北里柴三郎『傳染病研究講義』南江堂、明治29年（1896）。
北里柴三郎論説編集委員会編『北里柴三郎論説集』北里研究所、1978年。
熊谷謙二『思い出の青山胤通先生』青山先生生誕百年祭準備委員会、1959年。
熊本県立第一高等学校『隈本古城史』熊本県立第一高等学校、1984年。
小高健『伝染病研究所』学会出版センター、1993年。
志賀潔『或る細菌学者の回想』雪華社、1966年。

篠田達明『闘つ医魂・小説・北里柴三郎』文藝春秋、1994年。
 砂川幸雄『森村市左衛門の無欲の生涯』草思社、1998年。
 砂川幸雄『第一回ノーベル賞候補ノ北里柴三郎の生涯』NTT出版、2003年。

高野六郎『北里柴三郎』（現代伝記全集3）日本書房、1965年。

竹内均『難病に取り組み医学を発展させた人たち・ヒボクラテス、パス

ツール、北里柴三郎』ニエートンプレス、2003年。

長木大三『北里柴三郎』慶応通信、1986年。

長木大三『北里柴三郎とその一門』慶応通信、1989年。

長崎大学医学部編『長崎医学百年史』長崎大学医学部。

中浜明編『中浜東一郎日記』富山房、1992、95年。

野村 茂『北里柴三郎と緒方正規・日本近代医学の黎明期』熊日出版、2003年。

秦佐八郎『秦佐八郎論説集』北里研究所、1981年。

藤野恒三郎『藤野・日本細菌学史』近代出版、1984年。

宮島幹之助『高野六郎』北里柴三郎伝』北里研究所、1932年、1987年復刻。

森村市左衛門『困之礎』私家版、明治39年（1906）。

山崎光夫『ドンネルの男・北里柴三郎』2巻、東洋経済新報社、2003年。

吉見蒲州（和子）『紳士と藝者』営業館書店、明治45（1912）年。

若山三郎『人類をすくったッカミナリおやじ』信念と努力の人生・北里柴三郎』PHP、1992年。

Kitasato Institute and Kitasato University, *Collected Papers for Shibusaburo*

Kitasato, Kitasato Institute, 1977

Kitasato Institute and Kitasato University, *Collected Papers of Sachichiro Hata*,
 Kitasato Institute, 1981

「雑誌論文／記事」

緒方規雄「北里、緒方両先生」、『日本医事新報』日本医事新報社、第14

15号、昭和26年（95）。

鹿子木敏範「熊本における医学教育の回顧・再春館創設から官立熊本医科

大学発足まで」、『熊杏』（母校創設八五周年記念特集号）熊本大学医学

部同窓会、1981年。

北里善三郎「父北里柴三郎 記憶の泉から」、『三田評論』慶応義塾大学出

版会、8、9合併号、1971年。

田口文章、合田恵「北里柴三郎の明治25年」、『日本医事新報』日本医事

新報社、第3777、9号、1971年。

山崎光夫「シャーロックホームズの日の丸」、『オール読物』第52巻6号、

1997年。